一般演題

繰り返し夜間救急外来を受診する機能性ディスペプシアに対して鍼灸漢方治療が奏功した１例

A Case of Functional Dyspepsia Successfully Treated with Acupuncture and Kampo Medicine Presenting with Repeated Nighttime Visits to the Emergency Department

笹松信吾[*1], 藤本新風[*2]
[*1] 洛和会丸太町病院 救急総合診療科
[*2] 鍼灸 藤本玄珠堂

Shingo Sasamatsu[*1], Fujimoto Shinpu[*2]
[*1]Rakuwakai Marutamachi Hospital, Department of Emergency and General Internal Medicine
[*2]Fujimoto　Genshudo　Acupuncture clinic

【緒言】

機能性ディスペプシアに対してはいくつかの治療法が提案されているが、治療反応性に乏しいことも多い。今回長年夜間救急外来を受診する患者に対し鍼灸漢方治療が奏功した 1 例を報告する。

【症例】

30 歳代の未婚女性。10 年前に心窩部痛を訴え 23 時頃に救急外来を受診。初めてブチルスコポラミン 10mg を静注し速やかに腹痛改善した。その後心窩部痛や右季肋部痛が 2-3 回/月の頻度で出現し、おおむね 20～1 時に夜間救急外来を受診していた。受診時はいつも申し訳ない気持ちがあったとのことだった。以降も同様の経過が続き消化器内科で精査を受けたが特記所見なく、"胆嚢ジスキネジア"と診断された。生活指導、偽薬、その他薬剤は無効であった。

演者の初診時は月経 2 日目で夕食 2 時間後の 20 時ころから心窩部痛が出現し 22 時に救急外来受診した。発症は排卵前後および月経前後 3 日以内が多く、食後 1 時間以内に腰部の重だるさを自覚した後に右季肋部が張り、徐々に鋭い痛みに変わるとのことであった。腹部圧痛は強いが反跳痛はなく、右不容を中心とする狭い範囲に限局。腹部超音波では胆嚢に特記所見なく、十二指腸球部に限局して蠕動が全く見られなかった。北辰会方式に基づいた問診および体表観察所見から肝胆湿熱証と弁証し,疏利肝胆/瀉肝除湿目的に右胆兪に奇経鍼という 20mm の 3 番鍼を 10 分間置鍼した。その後腹痛が改善し十二指腸蠕動の著明な改善を認めた。Rome IV 基準を満たし新たに機能性ディスペプシアと診断した。

【結果】

以降週 1 回前後の頻度で鍼治療を継続し、腹痛出現時は大柴胡湯去大黄を頓用することで、救急外来受診頻度は 3 ヶ月に 1 回に改善した。

【 考察 】

夜間救急外来を頻繁に受診する患者はときどき見受けられる。多くは心因性とされ対症療法で帰宅するが忙しい時間帯に医療資源を消費することになる。東洋医学的な介入を行うことでこれらの受診頻度が減少する可能性が示唆された。

キーワード：機能性ディスペプシア, 胆嚢ジスキネジア, 北辰会方式、少数鍼